

おかしいと気づく力について

森下麻里菜（訪問看護師・大学院生）

貴重なお話をありがとうございました。講義の中で驚くことがとても多く、時間があっという間に感じました。

特に妊婦全員に計画分娩がされていたこと、陣痛促進剤の被害を受けていることに気づかないまま過ごしている人が多いかもしれないことは衝撃的でした。もし自分が将来妊娠、出産をする際にはどんな治療をされるのか、詳しく把握したいと危機感を強く感じました。

医療に関することは専門性が必要になるからと、従来は医療従事者中心の閉ざされた議論だったと思います。そこに勝村さんのような患者を代表する一般的で健全な感覚をもった人が入っていたというのは本当に大きなことですし、心強いと感じました。

私は普段訪問看護師をしています。仕事を続けていけばいくほど、医療従事者の事情に合わせたような、「これはこういうものだから」というような感覚が無意識に身についてしまっている気がします。医療関係者以外の友人などと話して初めてその感覚に気づくようなことも度々あります。

医療従事者間のコミュニケーションが一番大事だとお話してくださっていましたが、本当にその通りだなと思いました。仕事に慣れるということは、「おかしい」という感覚が鈍くなっていくリスクとも隣り合わせなのだと感じました。厚労省が言っているから、医師が言っているから、と全て鵜呑みにせず「おかしい」と気づく力を大切にしていきたいです。

また、レセプトが開示されるまでにこんなにも時間と労力がかかっていたことを知りませんでした。確かに多くの患者さんは診療明細書を特に気にせず捨てていることが多いと思いますし、私自身もなんとなく受け取っただけでした。診療明細書がもらえない時代を想像できないくらいに私にとっては当たり前感じていましたが、今回経緯を知ることでその重要性を強く感じました。

どんな医療を受けていくらかかったのか、一人一人が関心を持つことで自分の医療に対する価値観や姿勢を見直すきっかけにもなりますし、貴重な税金をうまく分配できるようになったら良いと私も思いました。今はツイッターなどで大きな共感が得られるとそれが民意となって届きやすくなる時代なので、そ

